

<[SMGレポート 3010] 序文>

誘拐、人質、拷問、身代金、さらには---どこやらの、オドロオドロしい探偵小説か、ミステリーの世界の架空の話ではなく、21世紀ももうすぐ20年を経過しようとするこの現代、われわれが呼吸しているこの今の時代の真っ只中で、しかも様々な地域で、現実が発生している否定しようもない、残虐で血なまぐさい数々の事件や出来事---

20世紀が「戦争の世紀」と呼ばれたのは、一般的に、19世紀の産業革命を経て工業技術が飛躍的に発展し、それが当然軍事にも応用展開され、戦域が大規模化・広域化、二つのホットウォー（第一次・第二次大戦）後は、1917年のロシア革命を皮切りに世界各地に誕生し一大勢力となった社会主義圏と、欧米の旧宗主国を母体とする自由主義圏との、二つのイデオロギーによる対立が先鋭化し、ホットからクール（冷戦）に突入していったこの時代全般を評している為、とする見方が大勢であり、それ相応に理解できる処ですが、だとすれば、現在の状況は一体どう捉えたらよいのでしょうか？

文明対反文明という見方をする向きもあります。21世紀型の南北問題＝貧富の格差拡大＝ではないかという見解もあります。当代の我々の眼から見ると、原始的としか思えない習俗を維持しながら、電子機器を使いこなす---難民となってまで、より豊かな国に移住するという希望を果たした筈にも拘らず、流砂に呑まれる様に、次々に爆弾テロの実行者になる---

確かに、いずれの視点も間違っていないでしょうし、どちらの説にも納得できる部分があります。それでも尚、もし何かが足りないとすれば、21世紀を丁度境にして始まった情報技術革命（IT革命）という、世界的大転換に触れていないことが原因かもしれません。20世紀型の戦争では、相手国のインフラに致命的な打撃を与えれば、復興・復旧までに長い年月を要することから、その国の進歩発展を数十年遅らせる原因となる---と考えられていました。それなりの費用と時間をかけて構築されてきた近代的設備は、一旦破壊されると元通りにするまで、やはり、それなりの手間とヒマを要するからです。たとえば、ベトナム戦争が終結した当時、私達も、ベトナムの復興は遠い道のりの先にあるのだらうと考えていました。処が、その予想は見事に覆されたのです。ベトナムは、壊された近代を取り戻すという経過を辿らず（無論、全てではありませんが）、ワンストップ先の超近代に---という間にテレレポートしたのです。その代表例が通信分野で、いわゆる電信柱の敷設や地下ケーブルの埋設等という、どこであっても近代国家に至る過程で通らなければならない道筋であるとされてきた電話回線（有線）の普及に資金を回さず、携帯の導入に舵を切りました。本文では、このような事例も参考に、先史先例から学ぶべき事柄を探ってみたいと思います。